

[音 楽]

知覚・感受したことをもとに思いをもって表現する力を 育てる音楽科指導の研究

—小学校低学年における音色と音色の変化に着目させた器楽の授業づくりの工夫—

笹野 彩*

1 はじめに

音楽の授業は、「音楽の要素やそれらの働きが音や音楽を豊かにすることを感じ取り、児童一人一人がそれぞれ思いをもって表現する楽しさを味わえること」を目指さなければならない。美しい音楽を形づくっている諸要素を知覚し、それらの働きからよさや美しさが醸し出されることを感じ取ることは、音楽教育の学習内容の中核である。児童一人一人が、鳴り響く音や音楽を対象に、知覚・感受した諸要素の働きや役割を思いや意図をもって思考・判断したり、自分なりに工夫して表現したりする主体的な音楽学習が大切であると考えているからである。

宮下は、音楽の授業における楽しさについて、「音楽という対象と私たちとの相互作用の中で、音楽の情報を自分の知識や経験の構造に同化したり調整したりして、音楽を認識したことによる情動的变化の1つ」であると述べている。音楽の認識は、音楽を形づくる要素の知覚と、そこから醸し出されるよさや美しさの感受によって成立し、快・不快を含め、楽しい・面白い・満足といった情動が喚起されるのである。さらに、高須は、「聴き取る」・「感じ取る」という一連の流れである「音楽的な感受」が基礎となり、子どもは必然性を感じながら表現の技能を身に付けようとするようになる」と述べ、音や音楽を知覚し、感性を働かせて感じ取ることの重要性を主張している。また「児童が音楽について考え、よりよい表現を求めて考えたことをもとに自分の表現したいことを実現できるように、必然性を感じながら表現の技能を高めていく必要がある」と述べている。音楽学習の楽しさや喜びは、認知された過去の音楽体験の累加が音や音楽の美しさや豊かさを感じ取ることであり、さらに新たな音楽学習を通して自分の思いや意図から音や音楽について思考し、判断することによって、音楽の表現力が培われていくのである。

しかし、これまでの自分の指導を振り返ってみると、児童に「音や音楽を感じ取らせること」、「感じ取ったことをもとに、自分の思いをもち、表現の工夫をさせること」という点で、実践の深まりが図られていなかったと反省させられる。特に器楽の分野においては、児童が楽器を用いることで示す興味や楽譜通りに間違えないで演奏することのみに満足し、楽器のもつ音色やその響きの変化を感じ取らせる重要性を認識していなかったことへの反省が悔やまれる。「音楽表現を工夫する」ことに関しても、単に楽器の音色の識別能力向上に留まり、その楽器のもつ音色をどのように響かせたらより豊かな表現になるかの工夫までは至らなかったのである。

小学校において、特に聴覚能力の優れた低学年から、楽器のもつ音色やその豊かな表現に対する感覚を培い、同じ楽器を使っても、個々のイメージする音楽によって自ら音色の響きの変化を工夫できる児童を育てていきたいと考える。これこそが、主体的な音楽学習と言えるのではないだろうか。

2 研究の目的

小学校低学年の器楽の学習において、感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスとして5つのステップを用意する。その中に、一つ一つの楽器のもつ音色の特徴やその表現の仕方による音色の変化のよさや美しさを感じ取る活動、感じ取ったことやイメージしたことを言葉にする活動を取り入れることにより、その知覚・感受したことをもとに自分の思いをもって表現を工夫する力を育てることができかどうか、その指導の有効性を検証する。

3 研究の内容

(1) 感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスの重視

「感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセス」として、次の5つのステップを設定し、2つの題材の指導過程に位置付ける。

* 糸魚川市立能生小学校

- 〈ステップ①〉音色やその響きの変化のよさや面白さ感じ取る。
 〈ステップ②〉音色やその響きの変化と、そこから醸し出される雰囲気とのかかわりを捉える。
 〈ステップ③〉自分なりの思いをもち、豊かな響き合いのイメージを作る。
 〈ステップ④〉自分のイメージに合わせて、音色の変化を工夫する。
 〈ステップ⑤〉みんなでイメージを共有し、そのイメージに合わせて表現を工夫して演奏する。

単に歌ったり演奏したり音楽を聴いたりするだけの学習、音楽の知識の伝達指導や技能的な訓練に偏った学習は、本来の意味での表現力に結び付かない。音楽における憧れや興味の中で、感性を働かせて、音楽の美しさやよさを感じ取り、音楽に対して思考・判断することによって、音楽を工夫して表現する力が育つと考える。

本研究は、醸し出される楽曲の雰囲気と、その音楽を形づくる諸要素とのかかわり合いを感じ取り、諸要素の働きを理解し生かした自分なりのイメージに合う表現の仕方を工夫し、思いをもって表現していく過程を重視した実践である。音楽を形づくる諸要素の中でも、特に音楽表現で見逃すことのできない音色と音色の変化に焦点を当てた。

「感性を高める」「思考・判断する」「表現する」3つの働きを、音色への知覚・感受の学習を中核にしなが、相互に深くかかわらせることにより活性化させ、自分の思いをもって表現を工夫する力を育てていきたいと考える。

このプロセスは、実践1を行うことで、その必要性が明らかになってきた。実践2では、実践1の成果と課題を踏まえて、ステップ①～⑤を題材の指導計画に位置付けた。

(2) 一つ一つの楽器のもつ音色の特徴やその表現の仕方による音色の変化のよさや美しさを感じ取る活動

小学校低学年の児童は、楽器に興味・関心をもち、様々な楽器に触れて、自分でいろいろな音を出そうとしたり演奏したりしようとする。この時期の児童に大切なのは、身近な楽器に楽しく触れる中で、楽器のもつ音色や強弱などによる変化の面白さや美しさを感じ取っていくことである。そして1つの楽器でも、表現の仕方によって音色の響きが変わる面白さを感じ取っていくことが、自分の思いをもって表現の工夫をすることにつながるのではないかと考える。

(3) 感じ取ったことやイメージしたことを言葉にする活動

音や音楽を聴き、聴き取ったことや感じ取ったことを言葉にすることによって、個々の音色や音色の響きの変化について知覚したことと感受したことのかかわりをより明確に気付くことになる。また、音楽表現をするためには、「自分はこんなふうに表現したい。」「こんな音楽をつくりたい。」というイメージをもつことが大切であるが、そのイメージしたことを言葉に表すことによって、自分の思いが具体的になったり明確になったりすると考える。感じ取ったことやイメージしたことの明確化や具体化が、自分の思いをもって表現の工夫をすることにつながると考える。

4 研究の実際

【実践1】第1学年（9月） 題材名「でかけよう けんぱんハーモニカでいいおとさがしのぼうけん」

主教材『ばすばすはしる』（6時間）

〈ねらい〉鍵盤ハーモニカの音色の響きの変化に感じ取り、自分のイメージに合ったクラクションを工夫してつくる。

〈題材構成〉

	感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセス	○主な学習活動 ・予想される児童の反応
1	〈ステップ①〉音色やその響きの変化のよさや面白さ感じ取る。	○教師の鍵盤ハーモニカでの演奏を模倣し、いろいろな音の出し方に気付く。 ・「鍵盤ハーモニカって、いろいろな音の出し方があるんだな。」
2	〈ステップ②〉音色やその響きの変化と、そこから醸し出される雰囲気とのかかわりを捉える。	○鍵盤ハーモニカで動物の声や足音を工夫してつくり、「動物当てクイズ」をする。 ・「小鳥の鳴き声は、高い音で短く吹こうかな。」
3	〈ステップ③〉自分なりの思いをもち、豊かな響き合いのイメージを作る。	○場面の様子を思い浮かべながら『ばすばすはしる』を歌う。 ・「牧場や海を運転して楽しそう。」
4	↓	○好きな乗り物を決め、その乗り物のイメージをもつ。 ・「大きなトラックにしよう。重たい荷物を運んでいるよ。」
5	〈ステップ④〉自分のイメージに合わせて、音色の変化を工夫する。	○乗り物に合ったクラクションの音を鍵盤ハーモニカでつくる。 ・「どんな音にしたら、大きなトラックのクラクションになるかな。」
6	〈ステップ⑤〉みんなでイメージを共有し、そのイメージに合わせ演奏の仕方を工夫して演奏する。	○自分がつくったクラクションを『ばすばすはしる』の歌の中で演奏する。 ・「低い音でゆっくりクラクションをつくったよ。」

〈ステップ①〉 鍵盤ハーモニカの音色とその変化のよさや面白さを感じ取る

教師の出す音を聴き、その音を模倣して出す「まねっこゲーム」を行った。教師が出す音を真似し、鍵盤の位置を確認することで、今まで何気なく音を出して演奏していた鍵盤ハーモニカの音の特性に気付いていくことができた。1つの楽器でも、いろいろな音色の変化が工夫できること、その音色の変化の面白さを感じ取っていくことができたのである。

また、児童が口にした「大きい音」と「小さい音」、「高い音」と「低い音」などの言葉を取り出し、反対の音を探していくことで、音楽を形づくる諸要素に気付いていくことができた。

〈ステップ②〉 イメージと要素を結び付ける

自分で動物を1つ選び、その動物の鳴き声や足音をイメージして音づくりを行った。そして、「何の動物でしょう。」とクイズを出し合った。児童は前時の学習を生かし、ひよこの鳴き声を高い音で速いリズムで鳴らしたり、怪獣の足音を低い音の鍵盤を手のひらで複数押さえてゆっくり鳴らしたりという工夫をしていた。さらに、「高い音でかわいい感じだから、小さい動物だと思います。」「大きくて低い音だから、大きな動物が歩いているみたいです。」など、何の動物かをクイズにし、その答えの根拠を説明させることで、イメージと音楽の要素を結び付けて考えることができた。

〈ステップ③〉 車窓から見えた景色や好きな乗り物のイメージをもつ

教材曲『ばすばすはしる』は、バスに乗って車窓から眺める景色を歌った歌詞で、臨場感にあふれ、遠足などの楽しい気分を伝えられる曲である。音楽室につくった海や牧場、緑のトンネルなどのコーナーを歌いながら回ることで、見えた景色のイメージを広げていった。また、バスをいろいろな乗り物に変えて替え歌を作ったり、その乗り物の絵を描いたり、走る様子を文で表したりすることにより、その車のイメージを明確にしていった。

〈ステップ④〉 見えた景色や乗り物に合ったクラクションの音を鍵盤ハーモニカでつくる

鍵盤ハーモニカの音色の多様性を感じ取り、さらに見えた景色や好きな乗り物のイメージをもった児童に、『ばすばすはしる』の歌に続くクラクションづくりを提案した。そして、その車に合ったクラクションの音を、音の高さやリズム、音の組合せを考えてつくった。ダンプカーを選んだA男は、ダンプカーに対して「重たい荷物を運ぶからゆっくり走る。でも大きくてかっこいい。」というイメージをもち、低い音を2音重ね、ゆっくりとしたリズムで3回鳴らすクラクションをつくった。動物園バスを選んだB子は、動物の形をしたバスを描き、「かわいい。みんなが乗ると楽しくなる。」とイメージした。そして、高い音を使い、弾むようにしてクラクションをつくった。スポーツカーを選んだC男は、スポーツカーを「すごく速い。かっこいい。」とイメージし、高い音から低い音へ鍵盤を滑らせてクラクションをつくった。

〈ステップ⑤〉 つくったクラクションを歌の中で演奏する

一人一人が好きな乗り物をイメージしてつくったクラクションの発表会を行った。自分の乗り物を伝えた後、クラス全員が歌う『ばすばすはしる』に続いてクラクションを演奏した。聴いた児童の感想では、「リズムが細かくてかわいかった。」「高い音と低い音が交互になって面白かった。」など、リズムや音の高低などに注目し、つくった音の面白さについての感想がほとんどであった。乗り物のイメージとつくった音を結び付けて感想を言えた児童は少なかった。

〈成果と課題〉

実践1を通して、器楽の学習の方向が見えてきた。課題はステップ⑤にある。クラクションをつくった児童は、乗り物のイメージとクラクションの音を結び付けて、音色の変化の仕方を工夫していた。しかし、聴いた児童は、つくったクラクションの音の面白さのみに着目し、イメージと結び付けた音色の変化を感じ取っていたとは言えない。単なる発表会と感想発表で終わってしまったことが悔やまれる。ステップ⑤において、みんなでイメージを共有し、イメージと合わせて音色の変化を工夫できるような、言語活動や演奏の仕方を工夫する必要がある。

【実践2】 第1学年（11月） 題材名「『ちょうちょう』のおんがくプロデューサーになろう」

主教材『ちょうちょう』『ちょうちょうのぼうけん』（8時間）

〈ねらい〉 いろいろな楽器のもつ音色とその変化のよさや面白さを感じ取り、それをもとに自分たちのイメージに合った『ちょうちょう』の合奏を工夫する。

〈題材構成〉

	感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセス	○主な学習活動 ・予想される児童の反応
1	〈ステップ①〉 音色やその響きの変化のよさや面白さを感じ取る。	○木琴の音色の面白さを感じ取ったり、鍵盤ハーモニカによる『ちょうちょう』の旋律に木琴の旋律を加わったよさについて感じ取ったりしながら演奏する。 ・「木琴って、優しい音がする。合奏が楽しかったね。」

2		○鉄琴の音色の面白さを感じ取ったり、合奏に鉄琴が加わったよさについて感じ取ったりしながら演奏する。 ・「鉄琴って、すごくきれいな音だね。どうやって叩いたらもっと響くかな。」
3		○いろいろな打楽器で奏法を工夫しながらリズム遊びをし、それぞれの楽器の音色の面白さを感じ取る。 ・「同じ楽器でもいろいろな音が出せたよ。」「トライアングルはきれいな音だな。叩く場所によって音が違うね。」
4		○合奏に打楽器が加わったよさや楽しさを感じ取りながら演奏する。 ・「合奏に打楽器が入ったら、なんかお祭りみたいに楽しくなったね。」
5	〈ステップ②〉音色やその響きの変化と、そこから醸し出される雰囲気とのかかわりを捉える。	○合奏曲『ちょうちょうのぼうけん』を聴く。 様々な楽器の音色の違いに気付いたり、その面白さを感じ取ったりする。 ・「ちょうちょうが、怖いところに行ったり楽しいところに行ったり、冒険しているね。楽器の音が違うと、雰囲気が変わるんだね。」
6	〈ステップ③〉自分なりの思いをもち、豊かな響き合いのイメージを作る。	○グループごとにちょうちょうのパーティーをイメージする。 ・「私たちは、きれいなお花畑で動物たちが集まるパーティーにしよう。」
7	〈ステップ④〉自分のイメージに合わせて、音色の変化を工夫する。	○イメージしたパーティーに合う楽器を選んだり、その音色の響かせ方を考えたりする。 ・「お花畑だから、全体的に優しい雰囲気にしたいね。タンブリンを揺らして音を出してみよう。」
8	〈ステップ⑤〉みんなでイメージを共有し、そのイメージに合わせて表現を工夫して演奏する。	○イメージを共有し、選んだ楽器で全員で合奏し、音色やその響かせ方の違いによる合奏全体の雰囲気の違いを感じ取る。 ・「お花畑でのパーティーをイメージして、優しい感じで演奏してください。」

〈ステップ①〉楽器のもつ音色のよさやおもしろさ、合奏の中でのそれぞれの楽器の音色のよさや面白さを感じ取る

毎時間ある村に到着してくというストーリーで、木琴、鉄琴、リズム楽器の順に新しい楽器を導入させた。「リズム村」では、カスタネット、すず、トライアングル、タンブリンを決められた4種類のリズムに合わせて練習した。次の時間には、17種類のリズム楽器をローテーションで回りながら体験した。「木琴って、優しい音だね。」「森の音みたいだよ。」「鉄琴って、木琴より響く音だね。クリスマスみたいだよ。」「タンブリンって、いろいろな鳴らし方があるね。」「トライアングルも、叩き方によって音が全然違うよ。きれいな音の出し方を見つけたよ。」など、毎時間じっくりと音を聴いたり、演奏の仕方を学んだりしていくことで、それぞれの楽器の音色や奏法などの特徴を捉えていった。また、同じ楽器でも鳴らし方によって、音色の響きが変化することにも気付いていった。その中で、自分の好きな音色を見付けたり、「優しい音」「元気な音」などと、イメージをもちながら音を出したりしていく姿が見られるようになった。

また、毎時間、新しく増えたパートを入れたローテーションで回りながら『ちょうちょう』を合奏した。自分の鍵盤ハーモニカを持ちながら4小節の間奏で次のパートに移動して合奏をする「村めぐり」である。「木琴が合奏に入ったら、鍵盤ハーモニカだけの演奏よりも、楽しくなったね。」「鉄琴も入ったら、とってもきれいでクリスマスみたいだよ。」「リズム楽器が入ると、一気に賑やかになった。ちょうちょうたちがお祭りしているみたいだ。」新しいパート（楽器）が加わることで、全体の演奏がどのように変わるか、どんな雰囲気になったかを感じ取り、音が重なって溶け込んでいく美しさや楽しさを味わっていた。

〈ステップ②〉楽器の音色やその変化による雰囲気の違いを感じ取る

鍵盤ハーモニカをみの演奏に加え、木琴、鉄琴のメロディー、そしてカスタネットやトライアングルなどのリズム楽器を加えた合奏を経験した児童は、様々な楽器の音色に関心をもち始めていた。鑑賞曲『ちょうちょうのぼうけん』は、『ちょうちょう』の旋律を演奏する楽器が次々に変わる。音色、強弱、速度、音の高さ、リズムの違いにより、曲の雰囲気が次々に変わっていき、ちょうちょうがいろいろな所を冒険しているように感じる曲である。児童は、楽器が次々に変わって演奏されていることにすぐに気付き、そこから雰囲気の違いを感じ取っていた。

C：広い野原にいるみたい。→他C：バイオリンのきれいな音で演奏していた。他C：のんびりしているみたいだった。
C：暗い洞窟に入ったみたい。→他C：音が急に小さくなったから。他C：低い音になって怖くなった。

ちょうちょうが冒険した「場所」と、その根拠となる音楽を形づくる要素を関連付けて考えることができた。

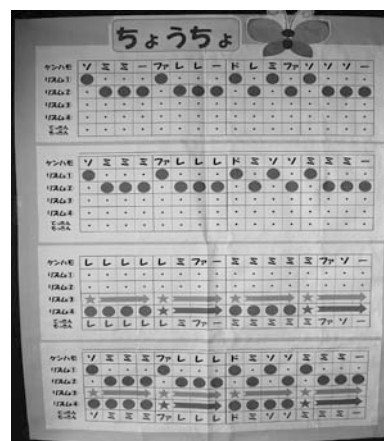


写真1 合奏『ちょうちょう』楽譜



写真2 ローテーションで回りながら全てのパートを体験する



〈ステップ③〉自分たちのパーティーの雰囲気をイメージする

楽器の音色やその変化のさせ方により、同じ『ちょうちょ』の合奏でも雰囲気が違うことを感じ取った児童に、自分たちでオリジナルの合奏をプロデュースしようと投げかけた。そして「ちょうちょうの他にも動物たちが集まってくるパーティー」を提案し、どんなパーティーにしたいかを一人一人に書かせた。似たイメージで4～5人のプロデュースグループを作り、「パーティーの雰囲気とネーミング」「ちょうちょうの他にパーティーに参加する動物（生き物）」「パーティーの絵」「リズム1～4の楽器」を考えた。鍵盤ハーモニカ、木琴、鉄琴は全グループ共通にし、リズム楽器のみ、そのパーティーの雰囲気に合うもの、そして1～4のリズムに合うものを選ぶことにした。

Aグループは、昆虫が夜に集まり、賑やかにお祭りをしているイメージで、合奏をプロデュースした。「大きな木にどんどん昆虫が集まってくることにしよう。」「昆虫たちが、木で騒いでいるんだよ。」パーティーのイラストを描くことによって、自分たちのイメージを具体化していった。

Bグループは、キラキラ光る雰囲気のクリスマスパーティーのイメージで合奏をプロデュースした。クリスマスツリーの周りに、サンタクロースやトナカイなどが集まってパーティーしているイラストを描いた。

表1 合奏「〇〇のパーティー」の計画書

グループ	Aグループ	Bグループ
パーティーの雰囲気・ネーミング	にぎやかなふんいきのよるのかぶとむしパーティー	きらきらひかるふんいきのクリスマスパーティー
パーティーに参加する動物	カブトムシ、クワガタ、かまきり、バッタ	サンタクロース、トナカイ、ペンギン、しろくま
パーティーの絵		
リズム1～4の楽器	リズム1 大だいこ リズム2 ギロ リズム3 トライアングル リズム4 小だいこ	リズム1 すず(スレイベル) リズム2 タンプリン リズム3 トライアングル リズム4 マラカス

〈ステップ④〉自分たちのパーティーの雰囲気に合う合奏を工夫する

Aグループが楽器を考える際に最初からこだわったのが、「お祭り」と「昆虫」の雰囲気を出すことだった。「お祭りだから、大太鼓、小太鼓を入れよう。」「昆虫だから、リズム2にギロを入れたらいいよ。ギーギー虫が鳴いている音みたいだもん。」しかし、T男がさらにこだわったのが、「夜の雰囲気」だった。「昆虫って、夜集まるんだよ。周りは夜で静かなんだけど、木の所だけうるさい方がいい。」そこで、静かな夜のイメージで、トライアングルを選択した。

Bグループは、キラキラ光るイメージを出すために金属の楽器を中心に選択したが、こだわったのが楽器の鳴らし方だった。特にリズム4のマラカスでは、「トナカイがそりを引いてやってくるようにしたい。」と言い、決められたリズムの中で強弱を入れる工夫を考えた。



写真3 自分たちがプロデュースした合奏について説明する

〈ステップ⑤〉プロデューサーから説明されたイメージをもとに、音色の響かせ方を工夫する

ローテーションで回りながら全員で合奏する前に、「プロデューサー」による説明を行った。「どんなイメージのパーティーなのか。」「それぞれの楽器はどのように演奏してほしいか。」イラスト等を示すことで、みんなでイメージの共有を図った。Aグループがこだわったのが、大太鼓の鳴らし方である。自分たちだけで演奏してみたときに、大太鼓の音で他の楽器の音が聴こえなくなったことを気にしていたからである。そこで、Y男はみんなの前で大太鼓を叩いて見せ、できるだけ小さな音で演奏するように訴えた。

Bグループプロデュースの合奏の後の児童の発言である。

C：鉄琴は音が静かに伸びていて、雪の音に聴こえました。しんしん降っているみたいに。

C：私は、トライアングルをこうやって（弧を描くようにやって見せながら）鳴らしました。その方が、音が響いてクリスマスらしいと思ったからです。

楽器を演奏する際、常にプロデューサーが考えたイメージを頭において、音色の響かせ方を工夫したのが分かる。

Aグループプロデュースの合奏後の感想では、イメージ通りの合奏になっていたかについて、音色からの雰囲気だけでなく、全体の音のバランス、合奏として音が溶け合っているかどうかについての発言も見られた。

C：ギロが虫の鳴き声みたいでした。だから、「ギーギー」鳴いて、虫のお祭りになったと思います。

C（Y男）：大太鼓がうるさくなかった。音の大きさを考えて演奏してくれたから、虫のお祭りみたいになりました。

児童は、音色とパーティーのイメージを結び付けて感想を言っていた。音色を中心とした音楽を形づくる要素と、演奏の雰囲気とを結び付けて音楽を聴くことができ、またイメージに近付けるように音色の響きを考えたり、合奏の中で溶け合うように音色の響きを工夫したりしながら演奏することができたのである。

5 考察

実践の結果から、「知覚・感受したことをもとに自分の思いをもって表現を工夫する力を育てる」ために、以下の3点が有効であることが分かった。

(1) 感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスでの題材構成

「音楽を形づくる諸要素とそこから醸し出される曲の雰囲気とのかかわり合いを感じ取り、自分のイメージに合う表現の仕方を追求し、思いをもって表現していく」というプロセスで、題材構成を行った。実践1では、鍵盤ハーモニカの音色の変化の面白さを感じ取り、自分が選んだ車のイメージに合わせてクラクション作りを追求し、演奏するという題材構成で行った。実践2では、様々な楽器の音色やその響きの変化の面白さや、合奏の中でそれぞれの音色が溶け合う美しさを感じ取り、自分たちがイメージする合奏をプロデュースするという題材構成で行った。児童は、音色に対する感覚を高めたことで、音色やその響きの変化とそこから醸し出される雰囲気を結び付けることができ、自分のつくりたいイメージに向かって追求し、表現することができたと考える。

(2) 一つ一つの楽器のもつ音色の特徴やその表現の仕方による音色の変化のよさや美しさを感じ取る活動

様々な楽器にたっぷりと触れる時間を取り、楽器の音色の特徴やその表現の仕方による響きの変化を感じ取らせる活動を行った。その中で、「1つの楽器でも、鳴らし方によって雰囲気が変わる。」「叩き方によって、音の響き方が違う。」と気付いたことにより、児童の表現の工夫の仕方が変わっていった。イメージした表現に近付けるため、楽器の音色の選択だけでなく、その音色の響かせ方を工夫できたことは大きな成果である。

(3) 感じ取ったことやイメージしたことを言葉にする活動

音や音楽から聴き取ったり感じ取ったりしたことを言葉にする活動を行った。「どうしてそう思ったのか。」「どこからそう感じたのか。」を音楽の中から根拠を見付け出し、音楽の言葉を使って話し合うことにより、音色やその響きの変化と、そこから醸し出されるよさや美しさとのかかわりを明確にしていくことができた。また、一人一人が聴き取ったこと、そこから感じ取ったことを言葉にして出し合うことにより、全体で共有することができた。それにより自分一人では知覚・感受できなかったことを知り、自分の聴き方に広がりや深まりができた。さらに、つくりたい音楽をイメージする際、文字・絵・言葉等を使って表現することにより、イメージを具体化することができた。特に低学年の場合は、「キラキラ」などの言葉やそれを描いた絵が、音色の響きをイメージする手助けとなった。音楽についての理解を深め、自分の思いをもって表現の工夫をする音楽学習において、「言葉にする活動」は有効な手立てである。

6 おわりに

現在2年生に進級した児童は、音色に対する感覚がより豊かになり、そして自分の思いをもち表現を工夫する子に育っている。鍵盤ハーモニカで演奏できるようになった『かえるのがっしょう』のグループ合奏では、「まつりが大すきなカエル」「のんびりやのカエル」など自分たちで題名を考え、打楽器を選んだり、リズムを工夫したり、速度を変化させたりしていた。また、全員で合奏する際も、楽曲の雰囲気に合わせて楽器の音色の響かせ方を工夫している姿が見られた。これは、入門期である小学校1学年から、楽器のもつ音色やその豊かな表現に対する感覚を培った積み上げの成果であると考えられる。音楽に対する憧れや興味の中で、感性を働かせて、音楽の美しさやよさを感じ取り、音楽に対して思考・判断し、自らの表現方法を獲得していくような授業改善を目指し、今後も研究を重ねていきたい。

〈引用文献・参考文献〉

- 1) 江口陽子「「聴いて・感じて・工夫して」の学習過程を大切にした音楽授業への改善」 2010年
- 2) 高須一「音楽科における新しい教育課程の創造」『初等教育資料』12月号 2008年 p.44-45
- 3) 高萩保治編著『音楽学習のフロンティア』玉川大学出版部 2003年
- 4) 宮下俊也「学校音楽教育と楽しさの関係」日本学校音楽教育委実践学会編『音楽の授業における楽しさの仕組み』音楽之友社 2003年 p.142
- 5) 文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 平成20年